

物論

総論

夫、衣食住の三つへ、鼎の足にひとつとして、一つもかくべからざる、人生第一大切なもの也。其中に衣へ、漢士にても五十にして絹を着るとて、班白迄ハ麻などの織たるに薄・蒲の穂のやうなるものをもみて、是を着し、かの齡に至れば、絹を着る事、我国も同例たる事、すでに御上より農家へもふれさせられたる事、伝へ承りつ。然れども、貧生のものへ、皆へ五十の齢に成たりとも、絹を着る事あたはざるべし。然るに宋朝の頃南蛮より綿の種子をつたへ來り、もうこしに弘り、皇國にへいにしへ種子を得て作りしも、いつしかたえて、ふたよび天文・文禄の頃渡りて作り始しより、貧民に至る迄暖

衣食住の三つは、鼎の足が三本必要であると同様で、人間の生活には欠くことのできないものである。そのうちで「衣」は、中国でも五十の歳になつて初めて絹を着るといい、その年齢になるまでは麻などを織つたものに、薄・蒲の穂のようなものをもんで入れ、これを着用した。日本でも中国と同様の「触書」が幕府や藩から出されていると伝え聞いている。しかし貧しいものは、たとい五十になつたところで絹を着ることはできないのである。しかるに中国では宋朝のころ、南蛮から綿の種が伝わりその國中に広まつた。日本でも昔に種を得て栽培したが、いつしか絶え、再び天文・文禄のころに入つてきて作りはじめてから、貧民に至るまでその身体を暖かく包むことができるようになつた。だから、綿は五穀に次いで、恵み多き作物として大切にしなければならない。綿作は大和の國で最も早く始まり、それより河内・山城・摂津・和泉の国々が熱心となり、その耕作法を知ることとなつた。それが播磨・備前・備中・備後そして四国へと広まり、多母につくつて外の地方へ売るようになった。まだこれ以外にも作ったところがあるというが、その地域内

に肌を覆ふ事とはなりぬ。されば五穀につきて、此靈草の徳を尊み仰ぐべし。尤此綿を作

る事ハ大和國に始て作り、夫より河内・山城・摂津・和泉の國々専ら丹誠して作り貪、又夫より播磨・備前・備中・備後又四国に弘り、多く作て諸國へうり出す事にて、其余にも作る國々ありといへども、繩か其國にて用ふる程にも至らず。殊ニ作り方も未熟とミえたり。

惣じて農夫ハ質朴偏固にして、をしへとしても、作りなれざるものを作る事ハ迷惑のやうに思ひて用ひず。此綿も曾て此土地にハ應ぜず、出来ざるもの耳言て、其罪を土地におふせて更に作る心なく、たまゝ作る國にも、作り方を誤てのミスぐるを、粗見およべり。これをなげくがゆゑ、つたなき言をのべて、此冊子を著すなり。ねがハくハ記す所の気候と種類とをよく考へ、其所の地味に引合せ、作り給へど、便とならん事広大なるべし。

一般に農民といふものは、素朴で頑固なので、教えさとしても、つくり慣れないものを栽培することを大変に嫌がり、教えを聞かないものである。初めは綿も、土地に合わないとか失敗するとかいって、その原因を土地にかぶせてつくろうとはしなかつた。まれにつくる地方があつても、つくり方を誤まつてゐるようだ。これを憂慮し、つたない言葉で一冊の本を著した。できれば記述した気候や品種を考慮して、地味に照らし合わせ、耕作されたら、大変に参考になるはずである。

九州にてハ農後國日田郡のうち一里四方斗の所にわづか作るのみにて、九國のうち外に作る所なし。此綿に作る所といふハ吾郷里にて、限町・豆田町といふ所也。祖父なる者農業の道に委しく、就中綿を作る事に妙を得て、家僕にをしへ作らしめ、尤其畑へ住所より七丁余もへだたりおれば、畑の隅に武屋敷の小屋をしつらひ、毎日至りて休らひ、作れる綿を見て余念なく樂ミとせり。或日白雨して、雷つよく鳴渡りけるまゝ、吾末だ十一・二歳の頃、大雨をしげ行て見るに、大臥息にて熟睡の体なれば、ゆり起して、此大雷にいかでいね給ふやといへば、不興していへらく、白雨のぶり出したれば、綿どもが生々としてよろこびあへるを見て心よきまゝ、熟睡して雷のなり出たるをもしらず。夫を起すハ心なき事なりとしかられたるを、今にわすれず。

都て農作を勤と思ひてハ大義也。我子を育る

心ならざれば、其利潤を得るにハ至らず。按るに綿へ作るに習ありて、穀物よりも手数多くかゝるもの故、一旦作りこゝろむといへども、とげずしてやむと見えたり。既にいにしへも異国より種子の渡り来りて作りしかど、おそそかにつひに種子をうしなひと見えて、衣笠内大臣、あづさ弓やまとにあらぬから人のうゑにし綿のたねへたえにき、とよみ給へり。ちかくは天文・文禄の頃又種子渡り来りて、五畿内辺に作り弘めたるを、元禄年中筑前の宮崎安貞といふ人、領主より厚く御恩をうけて諸国を経廻り、広く万万草の作りかたを老農に詢て書をあらへし、其中に此綿の事を委く記せり。是農業全書なり。然れども百年余前の事ゆゑ、今にくらぶれば流行におくれたる事どもあり。よりて予人のためにはかりて、自ら今の世専ら作れる國々に至りて、なほ老農に問ひ、筆にまかせて書つぶり置しを、書肆の需しきりなるにい

九州では、農後國日田郡でわずか一里四方ほどの地でつくっているだけ、他に栽培しているところはない。少しばかりつくっているというこの地が、私の故郷の限町・豆田町である。祖父は農業のことについて詳しく述べ、とりわけ綿作の技術に熟達していた。下人に教えてつくらせていたが、綿をつくっている土地は住居から七丁余りも離れていたため、畑の隅に二疊敷の小屋を建て、祖父は毎日そこを訪れては休息し、栽培している綿を見ていたは楽しんでいた。私がまだ十一、二歳のころであったが、ある日夕立が降り、雷が激しく鳴る中を小屋へ行くと、祖父は大いに寝入って熟睡していた。「この大雷鳴り渡るときに、なぜ眠つておられるのか」と私が振り起こすと、祖父は不機嫌そうに、「夕立が降り始めて、綿が生き生きと喜びあっているのを見ていて、そのまま気が良くなつて眠り込んでしまい、雷が鳴っているのも知らなかつた。良く眠つてたのに起こすとは思いやりがない」としかられたことを今でも覚えていた。

農作業を義務と思えば、それは面倒くさいものである。自分の子ども

を育てるような心で励まなければ、利潤を得るまでには至らない。綿をつくるのには栽培上の要領があつて練習が必要であり、穀物の耕作よりも手間がかかる。そのため一度つくつてみようと試みても、なかなか最後まで成しとけることはできないようである。すでに古代にも外国から綿の種が渡来してつくったが、粗略に扱つたために種を絶やしてしまつたようだ。衣笠内大臣は、「あづさ弓やまとにはあらぬから人のうゑにし綿のたねはたえにき」と詠まれた。最近では天文・文禄のころにふたたび種が伝わり、五畿内およびその近辺で栽培されていた。それを元禄年間に筑前國・宮崎安貞という人が領主の力添えを得て諸国を巡回し、あらゆる植物のつくり方を老農に尋ねてそれを著書にまとめた。その中に、この綿作についても詳しく述べている。それが『農業全書』である。しかし何といっても百年余りも以前のことであるため、現在と比較すると古めかしく違つていることもある。よつて私は人のためを図つて実際に綿作の盛んな國々を巡り、老農に問い合わせ綴つておいたものを、書店の熱心なすすめでとうとう出版するに至つたのである。

なみがたく、つひに梓たのぼせぬ。

(1) 雉 古代中国で食物を煮るのに用いた器物、はじめは土器だったが、後に銅器になった。両耳・三足を普遍としたが、四足のもある。(2) 斑白 白髪まじりの毛髪、ここではその年齢をあらわす。(3) 宋朝の頃……つたへ来り 中国での木綿の栽培は嶺南では唐のころ、次いで福建にわたり宋末・元初には江南に及んだ。同じころ西域を経由して陝西地方にも栽培された(加藤繁『支那經濟史概説』)。(4) ふたび天文・文様の頃渡りて 綿種の再来は正確にはわからないが明応(一四九二—一五〇〇)ころといわれている(小野鬼嗣『日本産業發達史』)。詳細は「解題四一四ページ」参照。(5) 其余にも作る……用ふる程にも至らず 「綿圃要務」の発刊ころは、すでに東海・関東・山陰において綿の商品化が相当にすすんでいた。詳細は「解題四二一ページ以降」参照。(6) 横町・豆田町 現大分県日田市、当時は日田郡内。(7) 衣笠内大臣 衣笠家良(一四〇〇—一四八〇)後京極摂政九条良經の三男。統古今集の撰者の一人、「新撰六帖」第五、綿に「しきしまや大和にはあらぬ唐人の植てしわたたねはたえにき」と出ているが、本書にある「おひさむやまとには……」の歌はどこにも出てこない。先の歌を永常が憶え違いをしたのである。この時代に「あひさむ」を「やまと」の枕詞につかった例は見出し難いのもその証明になる。(8) 五畿内 皇居周辺の五か国をいう。大化改新に畿内の範囲を定め、大和・山城・河内・攝津の四国に分け、さらに河内から和泉を分離して五畿内と呼んだ。(9) 宮崎安貞(一六一三一一六九七)江戸前期の農学者。安芸国広島藩士宮崎儀石衛門の一男として広島に生まれる。二十五歳のとき筑前福岡藩主黒田忠之に仕え禄100石、のち故あって去り全国を巡遊し、元禄10年(一六九七)『農業全書』10巻を著す。

綿の実雌雄葉^{シラガノ}圖說

○一之図へ、花の全圖なり。

○二之図へ、顯微鏡を以て見たる所の図なり。

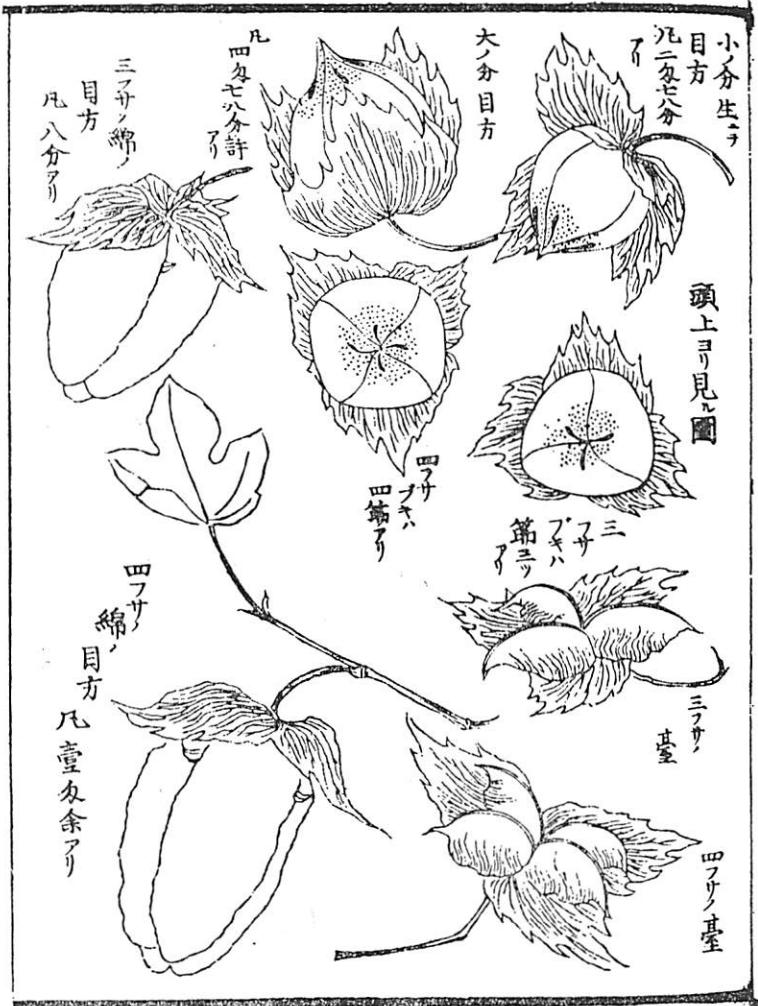
○○(III)(六)(一)の図は、花の全圖である。

○○の図は、顯微鏡で観察した図である。(1)、(2)、(3)、(4)すべて同じ。

綿全圖

綿全圖





モモ之図

小ノ分生ニテ目方
凡二匁七八分アリ
大ノ分目方
凡二匁七分アリ
三ヲサノ綿ノ目方
凡八分アリ
頭上ヨリ見ル圖
三ヲサノブキハ筋三
ツアリ
四ヲサノブキハ四筋
アリ
三ヲサノ台
四ヲサノ綿ノ目方
凡壹匁余アリ



モモ之図

花之図
正面之図
花ビラノフチニ
紅ノ色少シヅアリ
底ノ色黒紅ノ如シ
花ビラノフチニ
紅ノ色少シヅアリ
曉鐘成寫

○一二の図の甲は雌薬なり。三条親しく相比して、少し左によれて、本細く、先漸くふとり、末の先丸くして三ツにわかる。末黄にして下漸く白く、薄褐色次第に色濃くなりて、終に実の頭の尖りたる所に入る。実は障瓣(ハナ)にて三室に分れ、其瓣(ハナ)中央(ハナ)にて堅に合し、雌薬の本其中央を下る。実四ツに分れ、内室又四ツになるハ、雌薬もまた四条あり、仁ハ丙の符の如く、細条を以て其中央に繋ぐ。されば雌薬の本微細(ハナ)の脈絡(ハナ)となり、別れて各仁にいると見ゆ。

○三の図ハ雌薬の、実の頭の尖たる所にいるものを見する也。

○四の図ハ雌薬の末先を、第一番の頭微鏡にて見るもの也。微細(ハナ)の黄色の球、ひしくと附着す。

○二の図乙は雄薬なり。美黄色にして茎あ

○三の図は雌しべで、子房が頭のとたがつたところへ入っている図である。

○四の図は雌しべの先端を、第一番の頭微鏡で観察した図である。微細な黄色の球がぎっしりと付着している。

○一の図丙は雄しべである。美しい黄色で茎がある。実の蒂のきわか



① ③の図のもゝ
の片かへをわりて
ミれば中ニ綿と核
子を存す
② 紹の実の尖り
ヒシとつき居る
綿連りしかたち
甲 雄しべ 丙 モ
③ 紹の実の尖り
ヒシとつき居る
綿連りしかたち
甲 雄しべ モ
④ 雄しべハ三ツの
ゆびをあつめたる
如く三ツニわかる
⑤ 丙 甲 因
雄しべのかたち
これ勢氣なり
雄しべハ三ツの
ゆびをあつめたる
如く三ツニわかる
⑥ 丙 甲 因
雄しべのかたち
これ勢氣なり
雄しべハ三ツの
ゆびをあつめたる
如く三ツニわかる
⑦ 丙 甲 因
雄しべのかたち

り、実の蒂の際より薄く白き皮生じて、ひしと実を包む。親しく包めども、其肌は離れて少し繋がる所なし。実の形にしたがひて、頭の尖りの所より雌蕊を包み、管となりて次第にうすくなる。其管の所にて、四方に無数の雄蕊を生ずる事、温茸の叢り生じたるが如し。雄蕊の形も又温茸の細く長きが如し。茎は本根白く、漸く薄褐色へとし、頭へ内白く外黄なり。茎はその白き所の中央に植へ入したり。

○五の図甲は頭なり。これハ雄蕊の両岐になりたるものなり。

○六の図亦同じ、其形ち少し異なり、是ハ開きたるとすばみたると有と見えたり。丙ハ黄色の微細の球なり。○四図の雌蕊ハ指を二三本も集めたがごとく、堅にすぢありて、此小球へと其すぢの中を半分出たるものありと見ゆるなり。

○七の図ハ微細へとなる黄色の球なり。雌蕊の頭に多く着、また其茎へと所々にも着く。

ら薄く白い皮が生じてしつかりと実を包んでいる。びつたりと包んでいるが、皮と実とはつながっていない。実の形にそつて、先端のとがったところから雌しべを包み、管となつて次第に薄くなっている。その管のところで、四方に無数の雄しべを生じているのは、シメジダケが集まつて生えているようである。雄しべの形もまたシメジダケが細く長くなっているのと似ている。茎は根元が白く、次第に薄褐色となり、頭は内側が白く外側が黄色である。茎はその白いところの中央に入っている。

○四の図の甲は頭である。これは雄しべの両枝になるものである。

○四の図もまた同じで、その形は少し異なり、これは開いているとすればんでいるのがあるように見える。丙は黄色の微細な球である。

○四の図の雌しべは、指を二三本集めたようで、縦に筋があつて、この小球がその筋の中から半分ほど出ているように見える。

○四の図は微細な黄色の球である。雌しべの頭に多く付いて、同時に雌しべから吹き出すのである。するとこの球が雌しべの内に吸収されてしまつかりと付着し、その精氣から雌しべの内に通じて実の内の胚珠に生氣を通わして胚珠が成長するのである。

其形ちハ正しく丸くして、無数に至微至細へと球の如きもの、周囲に着て金米糖の如し。此球いづくに着とも、少も繋りたる所なし。恐らくは花の精氣にして、雄蕊より吹出す所なるべし。されば此球雌蕊の末に吸集められ、ひしと着て、其精氣より雌蕊のうちに通じ、終に実の内の仁に生氣を通ハし、其仁成長すとミえたり。

○雌雄気を通じて子を生ずるの理ハ、有情無情をいはず、形もあるもの皆一なり。皆人身に比例するに、花瓣へと陰門なり。雌蕊ハ喇叭管へとぞラバなり。実は子宮へとなり。実のうちの瓣は胞衣へとなり。仁は卵なり。瓣の中央より仁に行細条へと脈絡へとくは臍帶へとぞなり。小球へと則、精液なり。人の精液の内、無量数の微細小球ありて、精液子宮へと通じ、其微細の小球喇叭管より卵巣へと通じ、其小球の内より又吸はれて、親しく附着し、其小球の内より又

微細な球のようなものが、無数に周囲に付いて金米糖のようである。この球はどこに付いても、全くつながっていない。たぶん花の精氣であつて、雄しべから吹き出すのである。するとこの球が雌しべの内に吸収されてしまつかりと付着し、その精氣から雌しべの内に通じて実の内の胚珠に生氣を通わして胚珠が成長するのである。

○雌雄が気を通じて子を生ずるという理屈は、動植物を問わず形のあるものはすべて同じである。すべてを人間の身体に置きかえてみると、花弁は陰門である。雌しべはラバ管である。子房は子宮である。子房の中の弁は胞衣である。胚珠は卵である。弁の中央から胚珠に通じる細かな条の脈絡は臍帶である。小球は精液である。人間の精液の中に、無数の微細な小球があつて、精液が子宮に入れれば、微細な小球ラバ管から卵巣に通じると同様である。雄しべから吹き出した小球は雌しべに吸われ、ひつたりと付着してその小球の中からまた微細球の気を吐き、雌しべの管から通じて子房の中の胚珠に入つて生氣を起こすと記しておる。この理屈は、あらゆる草木・花実に通じるが、たまたま綿花である。その概説を説明したのである。

至微細球（ゴトクナ）の氣を吐て、雌藥の管より通し、
実のうちの仁に入て生氣を起すとするべし。此
理諸草木・花實に通じて同じけれども、偶綿
花に驗たれば、略して其要を解すと云爾。

(1) 実 子房・受精後肥大して実(桃)となる。(2) 仁 胚珠。(3) 実の蒂 花底。(4) 頭 雄藥の先 药。

棉の名并品類

物類品籍にのする所、東壁が曰く、木綿有二種似木者名古具、ト似草者名古終トと。草本のもの处处所植のキワタなり、木本のものパンヤなりとあり。我国にて作る所の綿則古終なるべし。是を木綿と書てわたと読む。木綿ハもろこしにて荔枝花とて作るよし、又樹頭綿とて植て三年程ハよくミのるよし。是ハやはり草綿かと覚ゆ。天明の頃もろこしより渡りて木綿の種子なるよし、植試たる事有。常の綿より木ぶり大きくして、凡五尺程に伸たれども、

綿の名称と種類

『物類品籍』に記載され、東壁がいうのに「木綿には二種類がある。木に似たるものと草に似たものを古終と呼ぶ」とある。草本のものは各地に植えられている「キワタ」であり、木本のものは「パンヤ」と記されている。日本で栽培しているものは「古終」ということになる。これを「木綿」と書いて「わた」と読ませている。中国では木綿を「荔枝花」と呼んで栽培している。もしくは「樹頭綿」といって、植えてから後、三年ほどは良く実を付けるものがある。これも草綿のようである。天明のころに、中国から伝わったという木綿の種を植えたことがあった。普通の綿よりも木のだけ大きく約五尺ほどにも伸びた。その年に普通の綿とともに枯れてしまったのだが、そもそも綿も普通の綿と変わらなかった。これを樹頭綿だらうという説もあった。しかし樹頭綿

其年常の綿とともに枯て、桃も綿もかへる事なし。これ樹頭綿ならん歟と言し事有。されども樹頭綿ハ植て三年程ハたもつとあれバ、しかとハいひがなし。我国にて今つくる所のわたハ草綿なれども、木綿とかきてわたとよミ、又絨たる所の反ものをも木綿と書てもめんともよめり。我國にてハかやうなるよミ方多し。世間一統斯唱來れる故、農業全書にも、やはり木綿と書いてわだとよませしと見ゆ。

は、植えてから三年ほどは生育するとあるから確かにともい難い。現在日本で栽培している綿は草綿であるが、「木綿」と書いて「わた」と読み、また織った反物を「木綿」と書いて「もめん」と読んでいる。日本ではこのような例は多い。世間一般の慣習に従つて、『農業全書』でもやはり「木綿」と書いて「わた」と読ませているようだ。

(1) 物類品籍 平賀源内(讀岐の人)の著。全六卷。宝曆十三年(一七六三)刊。和漢の動植物三百余をえらび解説を付す。日本の博物学史上著名な書物。(2) 東壁 明の李時珍の字。『本草綱目』の著者。引用は『本草綱目』木綿より。(3) 古具 振り仮名の「こばい」(古具)が正しい。中国における木綿および綿布の古称。(4) 古終 綿を取る草、草綿。(5) 蕉枝花 木綿の異名、木によじのぼる意味であろう。(6) 天明の頃……植試たる事有 宝曆九年(一七五九)初冬に幕府は、摂津・河内・和泉の幕領に少しづつ「紅毛木綿」種を配布した。生い茂るときは高さ一丈余となり、梯子をかけて綿をとり、一つの実から大なる手に一つかみ綿がとれるという噂が広まったという(『摂陽奇観』)。

綿を作る人心得の事

綿栽培者の心得

先綿を始て作らんと思ふ人は、只一年二年作

綿を初めて栽培してみようとする人は、わずか一、二年で利潤がない

て利潤なきものとて捨べからず。何事にても余所にて作るものなれば、同じやうにできぬ事はあるべからずと力を入、踏込んで始むべし。此綿も車にて糸につむぐを見て察すべし。先車を右の手にて廻し、左の手にてつむぐにも、紡車にわらしへをさし、夫へ篠巻の先を少し糸によりてまき付、引出して、それより段々引出してハ巻付する事、ならひ始へ定へうひ／＼しく、辛氣なる事なるべけれども、馴へ八十歳前後の少女も平氣にてつむぐやうになるなり。是をよく察して、綿も土地を論せず作りたまふべし。第一家ごとになくてならぬ入用のものを、手づくりにして沢山着用するのみならず、代料を他へとられず、なれど作るに樂みありて、多くとり得れば、用ひたる余りを売て、他より代料をとるやうになりて、甚面白きものなり。

凡綿ハ人手にかゝる事十四五段程度を経て用をなすものなれば、國民をにぎはすの大益あり。

からといってやめてしまわないことだ。何事も、よそでつくっているもののであるから、それと同じようにつくれないと努力し、思いきって始めるべきである。紺をつくるには練習が必要であることを、紡車で糸をつむぐようすを見て察するべきだらう。まず車を右の手で廻し、左の手で紡ぐだが、そのとき紡車にわらしへを挿し、それに「篠巻」の先を少し糸によつて巻き付けて引き出す。それから少しづつ引き出しては巻き付けること。習い始めは手馴れず思うに任せずいらだたしく辛氣くさいことだが、馴れてくると十歳前後の少女でも平氣で紡ぐようになる。この例をよく考えて、綿作はどんな土地にでも行なうべきである。なにより生活必需品を手づくりにして着用するだけではなく、その代価を取られることもなく、しかも、慣れればつくることが楽しみとなり、また多く製作したならば、余りを売つて代価をとるようになり、なかなか面白いものである。

先五畿内にてハ村々に綿仲買といへるものありて、作る所の綿を実のあるまと買集む。又操屋といへる家ありて、其綿を受取、多く人を雇入て、くり道具にてくらせて実を去、操綿となす。此操綿をくり粉とも唱ふ。さて其くりこを綿問屋へうれば、問屋より又諸國の商人にうり渡して運送す。されば船の運賃・陸の駄賃夫々の得分あり。扱うりたる先の國々の荷主より所々の店方へうりさばけば、其店方より綿打に遣し、打綿となし、篠巻とす。是を五畿内にてハぢんきと唱。年中此綿打を職とするものあり。扱是を糸につむぎて絆となし、仲買の家にうれば、夫より諸國へ機の織口に商ふ也。夫を縞などに縞にハ、其縞を仕分、染屋へ遣し、染させて、縞事なり。又其縞所を廻りて所々にて買集る仲買ありて、其集たるを問屋へ遣し、又白木綿ハ夫を仕入屋へ買受け、さまざまに染めたり、絞りなどして呉服・反物商へ売るのである。そして、呉服反ものを商ふ家にうる事也。

綿仲買がいて、栽培した綿を実の付いたまま買い集める。一方、綿屋はその綿を受け取り、くり道具で雇用人に練らせ、実を除去して練綿にする。練綿のことをくり粉とも呼ぶ。そのくり粉を綿問屋へ売ると、問屋から諸國の商人へ売り渡し運送する。そうすると、船の運賃・陸の駄賃などそれぞれの所得を生ずる。売った先の荷主から各店へ売れば、その店から綿打ちに出し打綿として篠巻にする。これを五畿内では「ぢんき」という。年中この綿打ちをして業とする者もいる。次にこれを糸に紡いで絆にし仲買へ売ると、そこから諸國の機の織口へと廻される。それを縞などに縞るためには、その「絆」を仕分、染屋で染めさせてから縞るのである。また縞屋を廻つて所々で買ひ集める仲買いがあり、その集めた縞物を問屋へ送り、また白木綿は仕入屋へ買受けさせ、さまざまに染めたり、絞りなどして呉服・反物商へ売るのである。

（1）綿を植る地へ、あまり自ら肥て、深く柔軟なるを好まず。是ハ余り栄え過れば、桃の付方少しき故なり。多く付てもかへつて落やすし。作るに至極の地へ、砂真土交りに、基石の如き小石ある土地、又ハ性よく強き中分の地に、肥し。手入れをよくしたる方よろし。何士にても常にハ温氣よくもれて、旱にハ水をひく便りある所よろし。山中にても、打ひらきたる土地ハ宜し。

（2）綿を植る地へ、あまり自ら肥て、深く柔軟なるを好まず。是ハ余り栄え過れば、桃の付方少しき故なり。多く付てもかへつて落やすし。作るに至極の地へ、砂真土交りに、基石の如き小石ある土地、又ハ性よく強き中分の地に、肥し。手入れをよくしたる方よろし。何士にても常にハ温氣よくもれて、旱にハ水をひく便りある所よろし。山中にても、打ひらきたる土地ハ宜し。

綿を作る國所、風土・寒暖の弁

綿をつくる土地ハ、土の味と寒暖を考へ、種子を撰、肥・手入をなす事肝要なり。只一通りの作り方をならひ覚たりとも、右の考なくてハ徒事となる也。依て予、諸国を経歴して、委しくたづねとひ、書き記し置いたるを、ありの儘左に記せり。綿を作らんと思ふ人ハ、よく此書を見て、その土地の気候と土の味とを考あへせて作りなば、誤ることあるべからず。

○綿を植る地へ、あまり自ら肥て、深く柔軟なるを好まず。是ハ余り栄え過れば、桃の付方少しき故なり。多く付てもかへつて落やすし。作るに至極の地へ、砂真土交りに、基石の如き小石ある土地、又ハ性よく強き中分の地に、肥し。手入れをよくしたる方よろし。何士にても常にハ温氣よくもれて、旱にハ水をひく便りある所よろし。山中にても、打ひらきたる土地ハ宜し。

綿を栽培する地方、風土・気候の話

綿をつくる土地は、地味と気候とを考え、選種や施肥や手入れをすることが大切である。单につくり方を一通り覚えて、右の考慮がないと失敗に終わる。よって、私は諸国を廻り、詳しく述べて尋ね問い合わせ記したままでここに記述する。綿をつくるうと思ふ人は、よくこの書を読んで、土地の気候と地味とを考えあわせて栽培するならば、きっと成功するはずである。

（1）車・紡車 糸織機（車）のことで、綿から糸を紡ぎ出で、またそれを、より合わせるのに用いる道具である。概津庄吉郡平野村が産地で、宝永三年（一七〇六）に同村では七軒の車屋が存在している（高屋一彦『近世の農村生活』）。（2）わらしべ 稲の穂の心。（3）篠巻 実綿を綿織り車（挽車）にかけて綿糸や、その他の混り物を取除き、その綿を綿弓で打返し綿を柔らかにして紡車にかけやすくなる。これを少しずつ篠竹に巻いて筒形の篠巻（じんき）をつくる。綿織車の製作で有名なのは播州加古川村で、四〇軒ほどがこれに従事し、中にには二万本もつくる者があり、東は三河から西は尾道あたりまでが販売圈だった（『加古川市史』）。（4）綿仲買 実綿を買集める商人。（5）操屋 実綿の綿糸を取去って綿綿（くり粉）にする業者。（6）綿打 綿弓をもつて綿綿を打ち、綿を柔らかくして綿綿にする。綿弓の製造は大阪郊外の玉造が本場で、明和六年（一七六九）一五〇軒、周防町六〇軒などの業者がいた（吉村武夫『ふとん綿の歴史』）。（7）紡 紡いだ糸を杼にかけて紡糸にする。これを熱湯に浸して糊をつけ縫（へ）・縫（おさ）入れなどして機械にかける。

（8）人、よくをして、其國の費をふせぎ、得分のつくやうにいたし度事なり。

作り出してから約十四、五段階の手数を経過し、大勢の職業となり生大勢の業となり、銘々家内のものを養ふ事なれば、是に増る靈草へなし。斯難有ものなるを、作らぬ國ハ此代料はみな他國へとらるゝ也。依て先綿を作る事を第一に、其村々の役人又ハ長たる人、よくをして、其國の費をふせぎ、得

活の糧となるため、綿にまさる靈草は他にない。このようありがたい物をつくらない國は、その代價をすべて他國に取られてしまう。よつて綿作を第一として、村々の役人、または長たる者は、村人によくこのことを教え、その國の支出を少なくして利益が上がるようになつてある。

都^とて日あたりよく、北をよさざたる所^所よろし。
○年々^{ねんく}きて同じ所^所に作るハよろしからず、
三年作らば地^ぢがへすべしなどといへる農夫あれ
ども、手入・肥^{いり}しの仕様^{しう}によりてハ、幾年も同
じ地^ぢに作る所^所もあり。

○田^たの湿氣^{しつき}もれる地^ぢに作れバ、「一两年ハ綿過^{わた}分^{ぶん}にとれて、虫^{むし}も付^はざる也。又くせつゝ事も薄^{うす}し。一两年綿を作りたる跡^{あと}へ稻^{とう}をつくれば、地^ぢ氣新^{きあらわ}にして、二年ばかりハ肥^{いり}し多くいれずして、よく稻^{とう}実^{じみ}のるものなり。

(1) 土の味 地味。 (2) 桃 実。 (3) 砂真土 砂壌土。 (4) 打ひらきたる土地 四方障害物がなく、開かれていると
いう意。 (5) くせ 発育異常、病氣など。

綿の種類^{(1)しゅるゐ}

○かぐら 白花黄花あり、すぐれたる
わた也。

○八寸黄花 青わたの類にして、花黃色

○かぐら 白花と黄花とがあり、良質の綿である。
○八寸黄花 青綿の種類で、花は黄色。実が多く収量が多い。

綿の品種

○かぐら 白花黄花あり、すぐれたる
わた也。

○かぐら 白花と黄花とがあり、良質の綿である。
○八寸黄花 青綿の種類で、花は黄色。実が多く収量が多い。

○水はけのよい田につければ、一、二年は綿の収穫も多く虫害もない。また、くせの付くことも少ない。一、二年綿をつくった後だ、そこで稻をつければ地氣も新しくなり、二年ほどは肥料を多く入れなくても豊作となる。

○毎年同じ土地に植えず、三年つくったら地変えをするべきだという農民もあるが、手入れや肥料のやり方によつては、何年も同じ土地につくっているところもある。

なり。よく実^{じみ}あり。とりめ
多^{おほ}し。
○備中^{びちゆう}ころり 河内にて専ら作る。なづけ
て越中^{えちちゆう}ころりといへども、
備中の誤なるべし。○赤わ
たにして一名^{いちめい}ばたん赤^{あか}とも。
花^{はな}ハうす赤^{あか}、少しまじりあ
り。

葉^はハかへでに似て、花^{はな}ハ黄^き
白^{しら}の二色あり。

○紅葉

葉^はが「かえで」に似ており、花は黄色と白の二色。

○長九郎^{ながくら} 早わたにして、いつものな
蝶^テ黒^{くろ}なるべし り。花^{はな}ハ赤^{あか}にして、至^{いた}て見付^け
よく、はやくかかるなり。

○長九郎^{ながくら} (蝶^テ黒^{くろ}であらう)

早生綿で優良品である。花は赤で、たいへん外観
が良く、早く枯れる。一町つくれば九反は早くで
きる。土地に適するかどうかを考えて植えること。

大町つくれば九反ハはやく
あがるなり。其土地に応不
応を考へ作べきなり。
赤わた也。尤木も葉も赤く、
花もうす赤なり。

○大こくび

赤綿の種類。木も葉も赤く、花も薄赤である。

○やんこ

木ぶりあひさき故の名なり。
五畿内にて小なるものをや
んこといへり。

○のら

赤わたにて染えよく、木ぶ
とれども桃すくなし。くり
粉へすくなけれども、其か
へりにハ糸至てつよし。

○山城麻わた

葉麻の葉に似てよへきたね
也。

○河内ばたん

大和の國中にてよく作る也。
花黄色にして、つんぱりとし
て半びらきなり。

○早わせ

至てはやく綿よくに依て、
わせのうへに早の字を付た
る見ゆ。花ハ惣紅にして
綿の取り・くり粉も多い。

○今七兵衛

花ハ紅と山吹色咲分也。取
めすべくなけれども、わたよ

○今七兵衛

たいへん早く綿を吹くので、「わせ」の上に早の
字を付けたようだ。花は全体が紅色で、綿の収穫
量やくり粉の量も多い。

○今七兵衛

花は紅色と山吹色との咲き分けである。収穫量は
少しが、綿も良質でくり粉も多い。七兵衛とい

○やんこ

木ぶりが小さいで名付けられた。五畿内で小さ
なものを「やんこ」という。

○のら

赤綿で、よく繁り木は太くなるが実が少ない。く
り粉は少量しか取れないが、そのかわりに糸が大
変強い。

○山城麻わた

葉が麻の葉に似ており、弱い品種である。

○河内ばたん

大和平野で多く栽培している。花は黄色く、つんば
りとして半開きである。

○早わせ

う人が栽培するのに熟練していた。大和國十一郡
(現奈良県磯城郡) 矢部村の人である。権九郎は
七兵衛の親である。

○今七兵衛

花は黄と紅とが混り、木肌が赤い。蝶も赤く木ぶ
りが低い。権九郎・七兵衛の二種類は良質である
として、摂津・河内で多く栽培している。

○権九郎

う人が栽培するのに熟練していた。大和國十一郡
(現奈良県磯城郡) 矢部村の人である。権九郎は
七兵衛の親である。

○権九郎

花は黄と紅とが混り、木肌が赤い。蝶も赤く木ぶ
りが低い。権九郎・七兵衛の二種類は良質である
として、摂津・河内で多く栽培している。

○てつぼう

花ハ紅半ひらきにして、て
つぼうの如くなれば付たる
名と見えたり。

○黄花

花黃にして見事也。

○さるの耳

葉猿の耳に似たる故付たる
名と見ゆ。

○赤わた

花木葉とも赤く、くり粉は少ないが、細口
なけれども、細口の糸によ

○てつぼう

花は紅色で半開、てつぼうのようであるところか
ら名付けられたようである。

○黄花

花は黄色でみことである。

○さるの耳

葉が猿の耳に似ているため、付いた名のようであ
る。

○赤わた

花・木・葉ともが赤く、くり粉は少ないが、細口
の糸に適している。

○青わた
木肌青く葉も青く花へ白し。
くり粉多くして糸白し。た
ねハ外の種子より小さし。
花黄にして、木ハ赤はだ青
白はだまじりあり。くり粉
通例なり。

○阿波
木肌が青く、葉も青く、花は白い。くり粉が多く
糸は白い。種はほかの品種よりも小さい。

○土佐わた
文政の始め頃土佐國よりた
ね揖州へ來り、大坂近在に
て作り始しより、諸所へ作
りて利を得る事多し。花ハ
白く、底紅にて、木肌は青
し。桃の付方多く、木ハ権
九郎より大ぶり也。くり粉
多く、綿の色白し。糸にハ
中也。外の綿より作りにく
し。よく作れば取め多けれ
ば、ミな此たねをまきて作

○土佐わた
文政初期に種が土佐から揖津へ渡り、大阪近辺で
栽培されはじめ、のち、各地へ広まり利益を上げ
ている。花は白く、底が紅色で木肌は青い。実の
付き方は多く、木は権九郎よりも大ぶりである。
くり粉も多く綿の色は白い。糸としては中位であ
る。外の綿よりもつくりにくい。しかし、うまく
つくれば収穫も多く、皆がこの種を蒔く。

○青わた
木肌が青く、葉も青く、花は白い。くり粉が多く
糸は白い。種はほかの品種よりも小さい。

るなり。

備後にて作る名

○和泉綿

花赤にして、白わたより玉
大き也。○備中邊にてへもよを
玉と云

○さゝわた

花黄まじり有、玉小さし。

○赤木

花赤黄まじり、玉大なり。

○大わた

田に作りてよろし。都て大
なり。くり粉多し。

○いのこ

権九郎に似て大わた也。花
黄、そこ紅。権九郎に同じ
く木赤く、綿白し。

此外其所によりてハ同じものにて名かへり、
又かハリたるたぬ多かるべし。爰に記すハ大和、
河内・揖津邊にて作る種なり。すべて綿の花ハ
もろ／＼の花とちがひ、皆開く事なく、半より
六七分迄ひらく也。諸草木の花びらハ、核子の
芽ぐむを風にあてざる為、たとへば囲ひの屏風

このほかに、地方によつては同じものだが名称がちがつてゐたり、また以上にあげたのと異なつた品種も多い。ここに記述したものは、大和、河内・揖津付近でつくつてゐる種類である。すべて綿の花は、ほかの植物の花とは違ひ、全開せず半分から六、七分ほど開花する。ふつう植物の花びらは、種実がはじめたものと風にあてないため、固いを屏風のようにする。しかし種実も少し生長して、大粒になるともう風にいためつけられる心配もなく、花びらは順々に散り落ちていく。綿は大きな

備後で作る名

○和泉綿

綿花は赤く、白綿より玉が大きい。備中邊では実
のことを玉という。

○さゝわた

花は黄が混つており、玉は小さい。

○赤木

花は赤と黄が混り、玉は大きい。

○大わた

田でつくるとよい。すべてが大きい。くり粉も多
い。

○いのこ

権九郎に似て大わたである。花は黄色で底は紅色。
権九郎と同様に木が赤く、綿は白い。

○種を取、貯置事

先たねをとるにハ、少しも枯枝なき木の、中分にして枝多く栄えたるを見て取べし。尤五分通りも吹たる、さかんなる時、下より三四の枝にて、能く吹切たる綿の太きを撰とるべし。種を取事ハ大事なれば、主人出て撰取べし。下女・下男などにまかすべからず。

○種を他方より求るにハ、核子(こしこ)を手のひらにてもみて見れば、能核子ハ薄黒し。悪駄たねハ赤くみゆるなり。又見やう、核子を指してひねり見れば、丸きあり。是あしきたねなり。又角あるあり。是ハよきたねなりとしるべし。

○貯置にハ操て核子をとり、能く日に干して俵に入、湿気なき所に置、晴天に折々出し、乾かすべし。

(1) 吹く 締実がわれて、種子についていた綿が実の外にあらわれる現象。

種を取、貯置事

種の取り方と貯蔵

まず種を取るには、少しも枯れ枝のない木で、標準的な育ちで枝が多く繁っているものを選ぶ。五分通り綿が実の外に現れた盛りに下から三、四の枝で、よく実が割れ切った綿の太いものを選らぶこと。種を取る作業は大切なことで主人が自ら出向いて取ること。下女・下男などに任せてしまわないことである。

○種を外から入手するさい、種実を手のひらにでもみて見れば、能核子ハ薄黒し。良質のものは薄黒くなる。不良の種は赤くなる。別の見わけ方は種実を指でひねってみると丸い。これは不良品である。また角のあるものがある。これは良質の種と知つておくことである。○貯蔵するには縛つて種実を取り、よく日に干して俵に入れ、湿気のないところへ置き、晴天のときに何度も取り出して乾かすべきである。

也。されど核子少しそだち、大粒になれべ最早風にもそこなへれざれば、花びら追々に散落るなり。綿ハ大きなる実をむすぶ故、花びら至て核子を大切に囲ひ、存分開かず、散事なくしてしばむ。是天道自然の妙也。○惣て綿にわせ。中手・おくての三種あり。早く烟をあけ、跡作をする所にてハわせをおほく作る事なり。花にて見分るにハ、大白の花ハわせなり、黄にして後後にうす赤くなるハ中手、紫にして黄花まるじるハおくてなるべし。此たねも少しづゝの変化あれども、赤・うこん・桜色などの種類多くわせとしるべし。摂津・河内にてハ多く黄花ものを作り。

- (1) 種類 品種。(2) 背わた 木肌の色が青い種類。
- (3) とりめ 収量のこと。(4) 赤わた 木肌の色の赤い種類。
- (5) 蝶萼カ。 (6) 大和の國中 本文三九〇ページに説明あり、大和平野部を指す。
- (7) つんぼり ちぢまりのこと。
- (8) 十一郡 十市郡。現奈良県橿城郡。
- (9) 核子 寒綿から纖維をとり去った種実。
- (10) うこん 鮮黄色。うこんの根茎で染めた色。

○すべて綿には、早生・中生・晚生の三種類がある。早く煙をあけて、そこに跡作をするところでは「早生」を多くつくる。花で見分けるには、大輪の白は早生、黄色で後に薄赤くなるものは中生、紫で黄色が混つている花が晩生である。これらの品種にも多少の変化はあるが、赤・黄・桜色などの種類の多くは早生であると思ふこと。摂津・河内では多く黄花の類をつくっている。

実があるので、花びらは種実をたいそう大切に囲い、充分に開かず、また散らずにしばむ。これは天道自然の道理というものである。